

彼氏の渉に振られてから二か月……確実に飲酒量は増えていた。だから今日も、散々度数の高い酎ハイを飲みまくって寝落ちをしたものだと思っていた。頭が重い。でも二日酔いほどひどくはないから、多めに水を飲めばいい。腰が痛いのは床で寝たからだだろう。アラサーに突入した身体に安物のカーペットは、いささかだいぶ心もとなかった。

「何よ……はい。一体、どうなの」

妙な部屋だった。日本庭園のような慎ましい緑と、枯山水。それから簡素なお寺。侘び寂び。そういう風流な風景画の冗談みたいな壁紙。どう考えても一般家屋や店に使われるような類のものではない。そんなクセの強さに反してカーペットはあまりにも普通なページジュ。こんなわけのわからない内装をする施設は、およそラブホテルくらいしか思いつかない。

一体何が起こっているのか。

まだ覚醒しきらない頭を振った拍子にひやつとした空気がわき腹を撫でて、ぞつとした。信じられないことに今まさに私は全裸だった。しかも脚を大きく開いて木製の椅子に縛り付けられている。なんとか暴れようにも、関節をうまく固定されているせいで力を込めることすらできない。太ももに当たる椅子の感触は硬くていかにもお尻が痛くなりそうだったが、そんな心配はない。

座面の股間に当たる部分になにも当たっていなかった。というより二枚の板に両太ももを乗っけているというのが正しいか。誰がどんな目的で。脳がようやく回転を始めるも、それより早く恐怖と混乱を極めている。

更には、広げられた脚の隙間から…、何かがちらりと見える。

「白い……糸？　じゃない、毛……？」

何かの束みたいなのが、こちらを向いて、じっとしている。生き物ではない。でも、生き物みたいに、待っている気がした。…いや、そんなことはどうでもいい。早くここから逃げなくちゃ、でもどうやって？

身動きがろくに取れない中、それでも体をよじろうとしていると、ガチャリ、と扉が開く音がした。

「やあ、千明瑞希さん。^{ちあき みずき}目覚めがいいんだね。起きて早々そんなに元気がいいなんて。……最近お疲れだろうに」

黒髪の男だ。黒いジャケットを着て、歩き方は年齢の割に悠々として上品さを感じる。女性視点では無駄がなく、ちよūdよい締まった筋肉。水分量たっぷりなんだろうと思わせる赤い目は、宝石みたいにきらきら輝いている。

彼とは初対面ではあった。……【オフライン】では。

「鑑……ハルくん？」^{かん}

「はは、会えて嬉しいよ、千明さん。俺、この日がとっても楽しみだったから」

ぱっちりとした大きな目が無邪気に細くなる。全裸で拘束されている自分を思うと、異常すぎる。

「え、何、なんなの、この状況?!　なんで……あなたが犯人なの?　なんでこんなことを!」

「はは、なぜなぜ期かな。銀行の受付なんて、質疑応答で成り立っているとこあるもんね」

わけのわからない挑発にぞっとする。っていうかこの人、なんで――。

「ああ、なんで自分の職業を知っているかなんて、簡単な話だよ。素行調査をしてたんだ。こっちも一応、公共事業でやってるからね。あまり有名な人なんかは狩りにくくて」

「……狩り?」

「そ。オレの国にはね、人間の精っていうのを食事に行っている淫魔がいるんだけど……君はその食料もといウォーターサーバー候補に選ばれたってわけ」

一方的にべらべらと喋るハルのどこか甘みのある美声。……もしかしたら何かの間違いかもしれないなんて思ったが、つい昨日、初めて通話したときのものと一致していた。

「もちろん、今すぐそのまま連れて帰ったんじゃ俺はただの誘拐犯だ。だから合意をとる。そういうゲームをこれからやる」

かこん、と股の下で何かが動いた音がした。今度はべちゃり、と股間になにか濡れた毛のようなものがあたる。大方先ほどのハケだろう。にわかに何が起きるか想像力が働いてしまう。子どもの頃、父親が夜中に見ていた番組の企画でやっていた。地上波にも拘らずアンアンと喘ぐ女性たちがひどく下品で、見ていられなくなって、……それでも釘付けになって、脳裏に妙に焼き付いていた。

「その顔！ よく知ってるね、ハケ水車ってやつだ。君からはよく見えないだろうけど、君の股間の下にはローションをたっぷり含んだハケがたくさんついた水車がある。これが回転してクリトリスをいじめる。千明さんには、30分これに耐えてもらう」

「な……っ、何それ！ 聞いてないんだけど！」

「だって言ったら君、絶対来ないでしょ？ まあ今回は結局拉致したんだけど」

「ごめんねと悪びれず呟いてから、ハルはどこまで話したかなと恋人のように私の拘束された手の甲に自分のそれを重ねる。もう片方の手で、【30:00】と赤字で表示されたデジタル時計をサイドテーブルに置いた。

「さて。君の敗北条件だけど、それは絶頂すること。ああ、それで即アウトにはしないよ。そのかわり、一回いくごとに制限時間は+1分追加される。そしてこの時計の表示が【100:00】になった時点でゲームセット。残り時間をペナルティとして消化して、君はウォーターサーバーになる」

すりすりとの甲を撫でながら、ハルは耳元で甘く囁いてくる。

「だいじょうぶ。単純計算で70回以上イかなければ君の勝ちで、帰れるんだよ？ 結構そっちが有利じゃない？」

「ほ……本当に帰れるんでしょうね？」

「もちろん。不安なら書面もあるよ？」

おどけて肩を疎めるハル。どうにも自分の仕事を茶化されているみたいで腹が立ったが——その職場も、自分がポカを繰り返したせいで、最近居心地が悪くなるばかりだ。

「なんで……なんで私なの。彼氏に振られて、仕事もミスばっかして。その上こんな……」

「あゝ、あるよね、そういうスランプみたいな時期」

わかるよ、辛かったね。こういう時だというのに、ハルは眉毛を下げ、少ししゃがんで私と目を合わせて優しく微笑む。およそ私をこんな目にあわせた張本人とは思いついほどの圧倒的な包容力。吸い込まれそうな深い色の、双眸のルビー。

そして。

「ま、こういうのって重なるものだよ。君は俺に選ばれてしまった」

あまりにも軽くて、容赦がなくて。

「待って！ 私、！ あの！ 彼氏いたの！ 鑑くん、私を選んだって！ 渉は!? 渉に何かしたら、承知しないから!!」

「わたるう？ 誰それ。知らないよ」

鑑ハルは指を鳴らす。ぎい、と木製の回転装置が小さく唸り、それは始まった。

ごりごりとした木材が皮膚を押し潰す痛みだけが最初に走った。ハケが動いていないのに、その存在だけで全身の血が逆流するような嫌悪感に襲われる。次の瞬間、股間にじわりと冷たいものが触れた。

「ひゅ……」

思わず息を呑む。柔らかい毛束がローションにぐっしりと湿っていて、肌を這う感触は生き物の舌を思わせた。最初はゆっくりと、まるで挨拶のように表面を撫でていく。

「大丈夫だよ。慣れるまで最低速度で回すから」